



夏見台幼稚園・保育園 ニュースレター 2023.12.10 号

園主の鳥居徹也です。夏見台幼稚園・保育園でのこだわりをニュースレターにまとめます。どうぞご覧ください。※配信停止の方はお手数ですがメールまたはお電話でどうぞ (info@trepont.jp まで)

〒273-0866 船橋市夏見台 2-16-1 夏見台幼保園
電話:047-429-7231

「からだが語ることば」とは何か？

小さなお子さんを持つ親御さんの不安の 1 つに「ことば」の問題があります。ある保護者の方は次のようなことを話してくれました。



できるだけたくさん話しかけた方がよいと聞き、シャワーのように子どもの耳元に話しかけていました

たしかにお子さんはよく言葉が出ていました。ただ、「ことば」と「からだ」と「こころ」の発達バラバラではありません。「ことば」だけを早く伸ばそうとしても…

そんなとき見つけた本が『子どものからだことば』(竹内敏晴著、晶文社)です。竹内氏は竹内演劇研究所を主宰しながら宮城教育大学の教授でもあり、「演劇と教育」「からだことば」の問題を探究した演出家(故人)です。

その実践は「心を解放する治癒のプロセス」とも言えます。印象に残った箇所を抜粋します。

泣く子に向かって「泣いてばかりいてはわからないから、ちゃんと話さない」と言う人があるけれども、ちゃんとことばで喋れるものなら、もともと泣きはし



ないのだ。

子どもが、「ことば」ではなく「からだ」でかたっていることが理解できなくなっている。



「話しことば」というものは、子どもの中に話したい、他人に何か伝えたい、という意欲が起こったときに初めて声として外へ発することができる。この人と触れたい、つながりたいという感じが起こらなければ、何も始まらぬ。ことばを「教える」などという作業はまだはるか地平線の彼方のことです。

話しことばの起点は、「この人に話したいという意欲」だということです。まずはお互いの基本的信頼感を築くこと。その先に、ことばは生まれます。

自閉的な言語障害児を見ていたある人が、「その子には話しかけたいという意欲がまるでない」と言っていたが、自閉した子どもはからだ全体で「私はあなたと話したくない、あなたとつき合うのが怖い」と叫んでいるのだ。



竹内氏自身、聴覚障害に悩まされてきた学校時代を経ており、障害児への支援の記録も多いです。1つ紹介します。

ある障害児の子ども(小学生)が絵カードに異常な興味を示し、ひたすらブツブツしゃべりたがっています。しかし教師は授業を進めたい。指導・誘導が空回りし、あせりだす。するとその障害児はセキ込み出しました。

のどにつまったものを吐き出したいな、セキというよりセキばらいです。すると教師が「おかしいな今日は、〇〇ちゃん力ぜをひいているのかなあ」。こちらから見ていると、そのセキの意味



はハッキリすぎる位なんだけれども、教師にはそれが見えない。

「オシマイにしようね。この針がここまできたらオシマイにしよう」。とたんに子どもは、ワァーとどなり始めて、けとばして、歩きまわって、手に負えなくなってしまった。

子どものセキは明らかに、自分のからだの中に受け入れられないものを吐き出すというアクションです。子どもにとってこの状況がどんなに「のみこめない」ものか、ということをからだが明確に語っている。これは「からだが語ることば」です。

それが「叫び声」に発展する。その叫び声が伝達の意志をもつとはつきり持ったときに、大人の使っていることばを借りてくる。

子どもに対応する場合に、まずからだは何を語っているかが読みとれなければ、ことばなどというものは成り立って来ようがない。

これは大変難しいことです。「からだが語ることば」をいかに聞き取るか？

おねしょとは、「上」で泣けない子どもが「下」で泣くことだ、という話を聞いたことがあります。これもまた「からだが語ることば」といえましょう。



教育の目的の1つが「ことばの習得」であることは間違いありません。ですがその前も大切なのです。乳幼児期の「からだが語ることば」への理解。私たち夏見台幼稚園・保育園では、「乳児期の育ち」から読みとれるメッセージを日々勉強して、できるだけ丁寧に子どもたちに関わりたいと考えています。

「ことば」には以下の3つの機能があります。

①伝達

②思考

③行動のコントロール

①は外に向かって放たれるものなので「外言（がいげん）」といい、②③は自分の心に向かうものなので「内言（ないげん）」といいます。①の外言としてのことばは大切ですが、②③の内言の発達も見落すことはできません。そして内言は外から見えないだけに、幼児教育においては、とすると軽視されがちです。私たちは子どもの「内言」を大切にしたいと思います（もちろん「外言」もです）。

ところで私たちの園ではよく園内研修をするのですが、看護師の萱岡先生が「ことばとからだ」の関係について話していましたので紹介いたします。



子どもと接していて、何となく不自然だなと感じたときに、その子どもの姿をよく観察する、あるいは同じ姿勢になってみる（まねてみる）。その子の身に（気持ちに）なってみる。するとどんな配慮が必要か、どんなおもちゃが適切か、ヒントが浮かんでくるといいます。

その上で、子どもの気持ちを代弁してみせる。「快・不快」という気分の言語化を手伝い、「感情」を教えていくのです。

耳に聞こえない「からだが語ることば」の意義についてまとめました。よろしかったらみなさんも今一度、お子さんの動きをじっくりと観察してみてください。新しい気づきがあるかもしれません。（終）